



ごみ処理公社が 再生可能エネルギーを提供



公社内のメガソーラーの
前に立つローレンツ代表
遠くにはたくさんの風車が。

ドイツ中西部、ライン・フンスリュック郡にあるラインフンスリュックごみ処理公社 (RHE) は、郡内 10 万 3000 人のごみの回収をしている。しかしここはただのごみ公社ではない。再生可能エネルギーの供給もしてあり、今では事業の 1 割がエネルギー供給となつた。

以前は民間業者がごみ収集をしていたが、高すぎたため 2005 年に公社を設立して収集を始めた。処理は外部業者に委託している。

ライン・フンスリュック郡は 137 の自治体を抱える農村地帯であり、最大のジンメル市は人口 8000 人だが、ほとんどは数百人から数千人の小さな村ばかりである。広い庭を持つ家が多く、家庭から出る木や枝を活用しようと、2010 ~ 2011 年にかけて郡内 3ヶ所に熱供給施設を建設した。地域熱供給網を整備し、隣接する学校やプール、老人ホームに熱を送っている。

木切れや枝は 20cm から 1m の長さに粉碎し、6 週間乾燥させて燃料とする。20cm 以下の木くずは近隣のワイン畑に 1tあたり 50 セント (60 円) と、ただ同然で譲っている。公社のトーマス・ローレンツ代表は「ペレットや木片と違って、うちの木切れはサイズも質もまちまちで石が混じってたりする。そ

れに見合った炉をつくるのは大変だつた」と話す。毎年 3000t を燃やして 700kWh の熱を販売しており、1100t の CO2 削減となっている。

家庭から出たごみを使って、子どもたちの学校を温めるというエネルギーの地域循環が実現。それまで天然ガスや石油などを買うことで外部に流出していたエネルギーコストが、設備やメンテナンス、配管敷設などの仕事が生まれることで地元の経済が活性化し、地域内に留まるようになった。その額はこれまでに 400 万ユーロ (約 4 億 8000 万円) にのぼる。

さらに同公社は光発電装置を設置して年間 180 万 kWh の電力を生み出し、2019 年夏より「ラインフンスリュックエネルギー (同じくロゴは RHE)」ブランドで小売を始めた。約 100 のエネルギー組合が所属するビュルガーベルクという組織と協力しており、公社の太陽光発電で足りない場合は、ビュルガーベルクから調達する。

また 2 年後には年間 1 万 3000t の生ごみを扱う発酵処理施設を建設し、メタンガスを燃料にコジェネレーションで熱と電力 (年間 450 万 kWh) を生み出す予定である。ガスは貯められるため、太陽光や風力発電の調整弁の役

割も果たすので、ラインラント・プファルツ州も支援している。

また環境教育の拠点として、毎年 1000 ~ 1500 人の子どもたちが訪れ、専用の建物や屋外でごみや環境について実践的に学んでいる。生ごみが発酵・分解していく過程は、羊の内臓のしくみと同じということで羊も飼っている。

「ごみのお墓」として靴やバナナの皮、ペットボトルなど 10 種類のゴミを 10 年前に埋めてあり、子どもたちはスコップで掘り出してどう変化したかを見る。教育大学が作ったプログラムで、包括的に学べるようになっている。

このように同公社はごみという枠を超えて、地域と気候保護に貢献している。ちなみに郡内には 271 基の風車がたち、再エネのメッカでもある。自治体が出資する風車はごく少しだが、土地の賃貸料などで恩恵を受けている。

同郡の気候保護の例を集めた動画「ライン・フンスリュック郡 エネルギー転換の先駆者たちの故郷」(日本語字幕付き) は一見の価値あり。

* youtube で以下の文字を入れて検索
updated version: Rhein-Hunsrück
(9.24 以降に、facebook・ごみかんホームページで、またメールニュースでも URL をお知らせします)

ごみかんドイツ特派員 田口 理穂

AKIRA の 成長記録



スウェーデンの少女グレタ・トゥンベリが始めた気候保護運動「Fridays for Future (未来のための金曜日)」はハノーファーでも今年初めから定期的に行われています。8月 23 日にも大規模なデモ行進が行われ、若者を中心に老若男女約 3000 人が市内を練り歩き、「What do we want?...何を求めるのか」「Climate justice!...気候正義」、「When do we want it?...いつほしい?」「Now!...今」と大きな声でやりとり。「私たちはここにいる。私たちは大声だ。だって (大人が) 私たちから未来を盗もうとしているから!」も迫力満点でした。

ちょうど環境研修にきていた獨協中高の生徒 20 人と塩瀬治先生たちも参加。11 歳の明はお兄さんたちにかわいがってもらい、大はしゃぎでした。デモに参加するため、事前に学校に 5.6 時間目の欠席を申請する必要があります。この日デモに参加したのは、クラスでは明ひとり。関心のある子とない子の温度差はあるようですが、参加者たちの熱気はすごく、みな楽しそう。気候保護についての要望書を市と郡の代表者に手渡すと、市は気候保護政策会議に若者を招待しました。この運動が政策決定に影響を与え、本当に地球は救われるかもしれない希望を持ちました。